
風、再び

ドクトルK

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

風、再び

【Zコード】

Z2903D

【作者名】

ドクトルK

【あらすじ】

ムーンレイスの地球帰還作戦は一応の結局を見た。しかし、戦いがあつたという事実は人の中に少なからず傷跡を残す。その傷も、ディアナの罪だというのだろうか？

1（前書き）

どうも、初投稿になります。

ご注意としてはこの小説は「ターンエーガンダム」を基にしていますが、一部設定に独自解釈がありますので、ご注意ください。

なお、かなりのネタばれもありますので見視聴の方もご注意を。

「面倒なことになった。」

ミラン執政官は組んだ両手に頭を落としてうめいた。もともとこの手の荒事に慣れているというわけでもないから胃でも痛いのかもしないと、横目でハリー・オードは思っていた。

「しかし、向かった先がイングレッサ領であることは不幸中の幸いです。正確にあそこへ向かったというのならまだ手を打つことができます。」

ハリーは率直にそう思っている。これがアメリカ大陸のはずれにでも行つていればむしろその方が大変だと彼は考えていた。

「ハリー、ではどのような手を打てばよろしいか？」

月の最高権力者、ディアナ・ソールは最も信頼をしているこの親衛隊長に尋ねた。

「親衛隊の手馴れを送り込みましょう。ちょうど一人、カプセルから起^レした者がいます。」

「そのもの一人で地球に送るのかね？」

「そのとおりです、執政官。しかし、彼は私と対等に切り結ぶほどの兵^{アーミー}です。」

ハリーの言葉には一片の不安もない、そんな堂々とした態度だ。よ

ほど彼に対する信頼が厚いのだろう。

ディアナはハリーが推薦するその人物のデータを見て、少し驚いた。

「この方、赤いスモーをお持ちなんですか？」

月において、赤いMSを持つているということは特別な意味を持つ。その使用は女王から直接下賜されるものだからだ。無論、パイロットとして最高の名誉もある。

「はい、ディアナ様より下されたものです。300年ほど、前のことだそうですか・・・」

ディアナーキエル・ハイムは決断を下した。

「よろしいでしょ、の方をお守りするためです。この方を、地球へ・・・・」

アメリカ大陸を席巻したムーンレイスの地球帰還、それは、なんだかしつちやかめつちやかの内にイングレッサを中心に徐々にムーンレイスが入植していった。彼らのもたらす技術はアメリカに新しい

風をもたらした。それは、片田舎の町であるビン・ヒートでさえも同じであった。なんとなく空気が変わってしまったような気がしていた。

ソシエ・ハイムは現在若年ながら、父の残した鉱山の経営者となつた。もつともまともに大学にも出ていない少女に経営が出来るわけでもなく実際の経営は父のころからの雇い人が彼女をサポートしてくれている。彼女は彼らから経営のノウハウを学んでいつは自分で経営を・・とは思つても、まだまだ男尊女卑の風は強い。それよりも、彼女にはどうにもならない悩みがあつた。

もはや田舎となりつつある自転車での暴走、自宅から川までの距離をひたすら爆走する。川べりについた頃にはへとへとなり、その場で倒れこむ。

「ハア・・・ハア・・・・」

肩で息をしながら、ソシHはまるかYの回りを見た。キングスレーの谷の方角だ。

あそこには、ディアナ・ソレルとロラン・セアック。あの時彼らと別れて以来、今どうなっているのかも知らない、といつよりも知りたいとも思わなかつた。

・・・否、知りたいのはただ一つ、ロランの本当の気持ちだった。

「これから、こんなに弱くなっちゃつたのかな・・・、わたし。」

飛行機なら、ほんの数時間であそこまでいけるだらう、車でも半日あればいい。行こうと思えばいつでも行ける。でも心がそれを許さない。いうまでもない、怖いのだ。拒絶されるのが、好きではないと言われるのが、自分が愛するのはティアナ・ソレルだといわれるのが、どうしようもなく、怖いのだ。

「あ・・・流れ星！」

輝きをちりばめた星空に、一筋の光が流れた。

幼子のように胸の内で願いを唱える。

しかし、彼女はまだ知らない、その流星は厄介事を運んできたことを・・・

イングレッサ領の支配権に関してはまだ微妙な部分がある。領主であつたグエン・ラインフォードが行方不明となり、現在はいつの間にかミリシャをまとめ上げてしまつたりリ・ボルジヤーノが一応領主として君臨している。しかし、いまだかつて女性の領主がいたことはないため、果たしてこれが正式なものなのかは疑問がある。が、月との交渉のできる人材が少ない状況において、確実なパイプである彼女の存在は大きかつた。そんな彼女の最近の趣味は・・・

片田舎の道を車が爆走する。まだ交通標識など必要でない時代、車はまさしく「走る凶器」であつた。元々お嬢様らしからぬ嗜好を持つ彼女はすっかり車のところになつてしまつた。

「リ、リリ様、もう少し速度を落とされでは・・・」息も絶え絶えに話し掛けるのはお供についてきたマリガンだ。

「大丈夫よ。これぐらいで、それに誰も通つてないじゃない……ああ……」

道に出た人影を見て慌ててブレーキを踏む。大きなブレーキ音が響き、そして……激突音がした。どうやら人を、跳ねてしまつたようだ。跳ね飛ばされた人は大きくバウンドし、草むらに落ちた。

「だ、だいじょうぶかしら……」

さすがに人並みの神経は持ち合わせていたか、男の落ちた方へ駆け寄つていつた。

うつぶせて倒れている男はぴくりとも動かない、気絶しているのか……あるいは死んでしまつたか。

「もし、しつかりしなさい、もし！」

肩を揺さぶり、声をかけてみると……。リリは肩をつかまれた。

「いてえ……。」いつ……あんなスピードで飛ばしやがつて……

ゆっくりと起き上がつた男はそう言って座り込んだ姿勢になる。

「なんだ、思つたより大丈夫そつですわね。」リリが少し安心してそう言うと男は

「なにが大丈夫だ！　まったく、人を跳ねたんならまず謝ると教わらなかつたのか……」

とかなり」立腹の様子だ。まあ、当たり前だが……。

「おー！　おまえー！」のお方をどなたと心得てある！　ボルジヤーの侯の息女、リリ様であらせられるぞーー！　そばにいたマリガンが声を荒げるが、

「それがどうした！　月ではたとえ、ディアナ・ソレル閣下でも人を車で跳ねたら謝るのが普通だーー！」
と男も黙つてはいない。

「月では・・つて、あなた、ムーンレイス？」

そういえば男の格好は地球のものとはかなり感じが違う。男もそれを認識していたのか、ちょっと黙つた後、リリに問いかけた。

「ああ・・・。そうだ、あんた月と連絡する方法を知らないか？」

「え・・・一応つりに行けば通信が出来ますけど・・・・・・

いきなりの問いかにリリは思わず正直に答える。

「なら、俺をそこまで連れて行ってくれーー！　急いで月と連絡を取らなければならぬんだーー！」

いきなり肩をつかまれてかなり困惑した表情を見せるリリ。

「貴様ーー！　自分が何を言つて居るのかわかつて居るのかーー！　興奮した様子のマリガンに、

「お黙り、マリガン。それってすこく重要なことなんですか？」

よつやく頭が回転してきたのか、優雅な笑みを浮かべるリリー、どうやらかなり面白そうなことが舞い込んできたようだ。

「ああ、重要だ、人の命がかかっているからな。」

男の目も真剣だ。リリーは一度大きくなづいた。

「いいですわ。車に乗つてくださる？ わたくしがご案内しますわ。」

そう言って車の方へ手をむける。男はつなぎで車へと向つていった。

「そういえば、あなたのお名前を伺つておりませんでしたわ。教えてくださいます？」

運転席にリリー、助手席にマリガン、後部座席に男が座つて、いざ走り出そうとしたときにリリーが思い出したかのように男に問い合わせた。

「アルベール。アルベール・グラット・・・大尉。」

「では大尉殿、参りましようか。」

車はもと来た方角を走り出した。衝撃の風が去つて、2度目の秋、再びイングレッサに烈風が走る。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2903d/>

風、再び

2011年1月28日14時47分発行